

# 川柳を教材とした日本語授業の実践報告

栗田英二\*  
(e-mail: kurita@daegu.ac.kr)

---

## 目次

---

1. 前書き
  2. 川柳を教材とした授業の実際
  3. 予想外の出来事
  4. 教材としての川柳の特徴
  5. 川柳劇の試み
  6. 学生へのアンケート
  7. 今後の課題
- 

## 1. 前書き

筆者は2005年以来、韓国の大学4年生を対象としたクラスで、川柳を教材として日本語・日本事情の授業を行ってきた<sup>1)</sup>。韓国人の日本語発音で特に留意しなければならないのは清音・濁音の区別、及び特殊音（長音・促音・撥音）であろうが、そのうち特殊音の発音指導においては川柳を教材とすることが有効ではないかと考えるに至ったのでそれを報告する<sup>2)</sup>。

---

\* 大邱大学校 人文大学 日本語日本学科

1) 日本語学科の4年生が対象のクラスで、週3時間のうちの1時間(50分)を川柳授業に当てた。1学期、15時間程度。ただし残りの2時間の授業の方で川柳を回収したり、川柳大会の投票だけをさせたこともある。

2) 論文を「・・・実践報告」と言う題名にしたが、この論文は通常の実践教育の研究論文の形式を満たしていない。私はただ教師として、学生が喜ぶ授業、学生の学習意欲が増進され、学力向上に役立つ授業を模索しており、実力差のある学習者が一緒に使える教材を探していただけに過ぎない。そして偶然、川柳を教材とすることの有効性に気付いたのである。その川柳授

なぜ川柳を選んだかと言うと、川柳の方が、俳句や短歌などよりも圧倒的に学生に評判がいいということが筆者にとっては経験的事実であったからである<sup>3)</sup>。もっと川柳を知りたいという学生の要望に応える形でこの授業は始まったのである。この時、五七五という形式への接近<sup>4)</sup>が日本語の特殊音の学習に役立つだろうし、日本語特有のリズム<sup>5)</sup>の習得にも寄与するのではなかろうかという予測も随伴した。

しかしながら、川柳の授業をすることで、学生達に日本語の聞き取り能力や発音能力、および全体としての会話能力の向上に直接的にどの程度の影響を与え得たかと言うことを客観的にデータとして実証するまでには至っていない。筆者(2008)は、データ収集を試みたが失敗した。失敗した理由としては、サンプルとなる学生数が少ないという問題以外に、学生達は川柳授業だけでなくこの同じ期間に個別に他の日本語関係の授業も受講しているので、そちらの授業からの影響をも受けており、それを排除して川柳授業だけの効果を測定することが難しいという問題などである。また基本的には特殊音だけの聞き取り能力・発音能力を分離して測定するという方法上の問題も大きい。これらの問題が解決できれば、川柳授業と(特殊音を含む)日本語発音能力向上との因果関係についてもっと正確に言及できるはずである。今後、類似した授業が数多く行われ、そこから有意義な統計的資料が生まれることを期待するばかりである<sup>6)</sup>。

---

業を分析・整理したものがこの論文である。従って、一般の論文のように、まず命題があり、そこから仮説が演繹され、その仮説を検証するという形で論文は構成されていない。この論文は特殊音の発音指導を主たる目標として始まった川柳授業を実践する過程で明らかになった様々な事実を報告することが目的である。この「様々な事実」こそがこの論文の生命である。

3) 俳句や短歌と比較してみると、川柳は「滑稽さ」「分かりやすさ」「自由さ」「人間臭さ」「庶民的」「現代的」というような特色を持つようである。

4) なぜ七五調かと言う問題に関しては坂野(1996)が鋭く解明している。

5) 筆者は「五七五は結局、4拍子である」という理論を支持しているだけでなく、詩歌のみならず一般の会話文においても日本語には4拍子の基底が存在し、このリズムに慣れることが日本語の聞き取り能力の向上につながるのではないかという独自の仮説を持っている。

6) 俳句を使った授業の報告は友岡(1994)、松井(2006)などいくつかあるが、日本的季節

現段階で明確に言えることは、川柳授業において学生達は「字余り・字足らず」の概念を知り、五七五のリズムに合わせて川柳を聞いたり朗読したりすることを求められ、実際に川柳を創作する段階では多くの学生は指を折って音節を数えるのである。このような過程を通して長音・促音・撥音を実感するだけでなく、これらの特殊音が日本語の音韻としていかに重要であるかということを学生は理解するのである。

本稿では、川柳を教材とした授業の実態を出来るだけ正確に記述する（第2節）。次に、川柳授業を行う過程で偶発的に判明したいくつかの出来事（例えば、教室の雰囲気明るくなり、学生の創造性が刺激され、学生の学習意欲が改善された、等という事実）を記述した（第3節）。川柳を教材にしたことによってこのような事は引き起こされると考えられるので、「教材としての川柳」の特徴を分析してみた（第4節）。次に、授業外活動として行った川柳劇の活動について報告したが、演劇においても川柳の特徴が効果的に発揮され、これまでの日本語劇にはない新しい可能性を提示することが出来た（第5節）。次に学生へのアンケートを示し（第6節）、最後に今後の課題をまとめた（第7節）。

## 2. 川柳を教材とした授業の実際<sup>7)</sup>

川柳を教材とした本格的な授業はこれまで行われていないと思われるので、少し冗長になるが筆者が行った川柳授業の様子を詳しく紹介したい<sup>8)</sup>。

---

感の鑑賞・創作に重点が置かれている。また、発音（特に長音）の指導をリズム記号を使って試みた中野（2010）の研究もあるが、まだまだデータ不足である。川柳を教材とした日本語教育・日本事情の授業はまだ未開拓の分野なので、先行研究は殆ど無いのが実情である。

7) ここに報告するのはこれまでの経験に基づき再構成した授業の様子であって、当初からこのように授業を行ったという訳ではない。長年の試行錯誤の結果である。

8) この2節は省略して、第3節「教材としての川柳の特徴」に進まれても構わない。

《導入時期》 最初の時間には、20句ほどの川柳が印刷された1枚のプリントを配布する<sup>9)</sup> (プリント 1)。

毎日新聞の川柳コーナーより

(プリント 1)

1. 傘さして 釣りしてる人 見てる人
2. 小さめの 傘を選んで 彼送る
3. また来ると 告げるかわりに 傘を貸す
4. 日傘さし 日焼けサロンに 行く女
5. 雨に傘 あと100年は 変わるまい
  
6. 美しい 人もしていた 片思い
7. 片思い だから今でも 続いている
8. 最後まで 片思いのまま 卒業す
9. 片思い 携帯番号 さえ知らず
10. 結婚は してもしてます 片思い
  
11. 体重計 3度も乗って あきらめる
12. 何センチ? 体重計で 孫が聞く
13. 下りた娘に ちょっと蹴られた 体重計
14. 正確な 体重計を たたいてる
15. 体重計 やさしく乗って あげたのに (以下 省略)

教師が1～5までの句を五七五のリズムで読んでみせた後、学生に復唱させる。そのあと、教師が1番と2番の句を簡単に解説する。次に学生を指名し、3～5の内か

9) 筆者が利用したのは毎日新聞の万能川柳コーナーである。授業で使用する川柳は、学習者の関心やレベルに合わせることが大事だが、特に導入部に近い時期のものは特に、易しく、面白く、鋭い穿ちを含むものを厳選すべきである。初期の段階で川柳に拒否反応を示す学生が出る可能性があるからである。だからと言って、易しいものばかりではなく、解釈が少し難しいもの、様々な解釈が可能なものなども含めるべきである。後述。

ら自由に選択させ・読ませ・日本語で解釈させる<sup>10)</sup>。一人の学生が解釈を終えた時に、それが「正しい解釈である」とか「正解である」とか「間違いである」とか言うようなコメントはせず、他の学生の別の解釈も発表させた後で、教師は自分の解釈を語る。導入の時期はプリント1のレベルの難易度で2-3時間、授業を繰り返すが、この時期に忘れてはならないことは、「五七五のリズムで読むことを大切にすること」「字余り・字足らずの概念を絶えず意識させるように努めること」「多様な解釈の可能性を認め、けっして正解を求めようとはしないこと」「言葉の謎解きで遊んでいるような、楽しい雰囲気を作り出すことに努めること」などである。

《中期1》川柳創作へ向けて誘導する様々な方法をとる時期である。(プリント2)にあるような句をひとつずつ板書し、( )内の言葉を推測させ、自由に発言させる穴埋め問題である。

犯罪じゃ	ないのか	眠る	姫に ( )	・・・	キス	(プリント2)
あの世にも	あつてほしいな	( )	・・・	イカと	酒	
まず遊べ	それが正しい	( )	・・・	夏休	み	
店員に	( )	たずねる	ネコの	エサ	・・・	味を
座れない	ときは	( )	前に立つ	・・・	美人の	
( )	「変わってない」	が	ほめ言葉	・・・	いつからか	*以下省略

クラス全体での共同作業でもあり、競争心も働き活発な発言が続くことが多い。この時、重要なことは音数を合わせることであって、「正解」を当てることでは

10) その際、「教師である私にも理解できない川柳が沢山ある。ここに集めたのは、私が解釈できたものばかりで、実は解釈できない句も沢山ある。だから、諸君がもし理解できない句があってもそれは当然であって、決して恥ずかしいことではない。」ということをや予め告げておくべきであろう、と思う。また「教師の解釈が必ずしも正しいとは限らない。もしかすると学生の解釈のほうが作者の意図に近いかも知れない。なにせ、短い詩なのだから、曖昧なところも多く、作者に聞かなければ本当のところは分からないのだ。」というニュアンスのことを付け加えておくべきであろう。それはこの川柳授業が、予め決まっている「正解」を見つけ出すタイプの授業ではなく、学生の自由な発想を尊重する形式の授業である、ということ初期の段階で示して置きたいからである。従って、初期の段階では「透明になれたら君は何をする」とか「僕以外みんな女性だったなら」というような句を使って、学生に自由に発言させる時間を設けることも有効な方法であると考えている。

ない。この穴埋め問題をやる時には多くの学生が指を折って、音節数を数える姿が見られる。後日の授業では学生にも川柳作りをさせることになるが、学生が川柳作りで一難苦勞するのは五七五の音節に合わせることなので、この指折り作業はその前段階としての練習になるのである。さらに、この穴埋め問題は、それ自体が既に創作活動の一部になっているとも言えるのである。

(プリント 3) は音節数を意識させつつ、所与の語句の中から選択させる問題である。5 音と 7 音を識別することが求められる。

(プリント 3) 例のように下の  の中から、適当な語句を選んで川柳を完成させなさい。

(例) 正確に パンダの白黒 (描けますか)

1. 窓ふいて ( ) 空にする
2. おかあちゃん ( ) 4 才児
3. 豊かには ( ) ( )
4. 目が似てる ( ) 常套句
5. ( ) 無視された手の ( )

\*以下省略

もっときれいな、せぬ科学、ハイタッチ、(描けますか)、試食あるよと、  
しても平和に、出産祝い、後始末 \*以下省略

(プリント 4) はさらに多様な組み合わせの中から、選択させる問題である。

例のように意味の通ずる川柳を作りなさい。 (プリント 4)

A	B	C
(例) 体重計	あまりよくない	言った知恵
ややあって	言いつつ 10 年	飽きた歌手
まずまずは	(例) 乗る前メガネ	日記買う
もう死ぬと	一番先に	ことを指し

ヒット曲	「両方好き」と	(例) はずす人 *以下省略
------	---------	-------------------

プリントの3や4はクイズ感覚もあって学生は楽しんでやっているように見えるが、時間も必要なので、宿題として提出するのがよい。このような宿題を通して学生は川柳創作の入り口にまで来ているのである。

《中期2》川柳の創作と川柳大会

次のような用紙を配布して宿題として川柳の創作を開始する。

はじめての川柳を作ってみましょう。名前 (                      )                      (プリント5) 1. 韓国の (                      ) (                      ) 2. (                      ) (                      ) あの日から 3. (                      ) (                      ) (                      )
--

川柳を始めて作らせる課題を出す訳だが、この時、ネットなどから盗作をする誘惑に駆られる学生が過去にあった。そこで最近は盗作の無意味さ、卑劣さ、などについて学生に予め一言触れることにしている。1や2は語句指定の川柳である。この語句指定は初めての創作へのハードルを下げただけでなく、同じ語句を使っての他の学生の作品との比較が可能になる、という点でも興味深い。

(プリント5)を回収し、次のような(プリント6)を作成して川柳大会を催す<sup>11)</sup>。

第1回 教室内川柳大会      名前 (                      )                      (プリント6)  気に入った川柳を三つ選んで番号にマルをつけましょう。  1. 韓国の 市場はいつも 戦争だ
--

11) この段階で、世界各地で日本語を学んでいる別の国の学生たちの川柳も一緒にして同じ投票用紙に作成すれば、川柳を通じた国際交流が可能になる。後述。

2. 韓国の アイドルの国 どここの国
3. 韓国の 今はこのまま いいのかな
4. 韓国の 名品ドラマ 皆殺し
5. のびません いくらたっても あの日から
6. 酒好きに なった就職 あの日から
7. 結婚後 幸せ続き あの日から
8. ダイエット 彼との出会い あの日から
9. 男性の 悲劇、結婚 あの日から
10. 株式よ 僕眠れない あの日から
11. 恨んでる おいしいものが いっぱいで
12. 車なし この言いわけで 彼女なし
13. スマートフォン 買っておしゃべり に夢中だ

\*以下省略<sup>12)</sup>

このプリントは投票用紙を兼ねているので、授業中に配布し、マルを付けさせてすぐ回収する。次の授業時間に結果を発表することになるが、誰がどの句に投票したかがわかる一覧表を教師用に作っておくと便利である。次の時間の授業では、まず投票用紙を各人に返却し、高得点の句を5句ほど、得点の低い順に発表する。その際、その句に投票した学生を数名ずつ指名し、どのように解釈して投票したのかをたずねる。その後、その句の作者を発表し、本人からその句の意味を説明させる。最後に、最高得票の句を発表し、作者が自作を解説する。その時、五七五に合わせるためにどのような工夫をしたかについても話をさせ、予め準備をして置いた、表彰状を授与する。その後、残りの時間で選外の全ての句を、字余り・字足らず・語割れ・句割れ・句またがりなどの観点から添削を行う<sup>13)</sup>。最後に教師の好みと断った上で、川柳として優秀句を発表し川柳大会は終わる。こ

12) この投票用紙に記載する句は20句を超えないようにすることが必要だ。余りに多いと選句するのに時間がかかり過ぎるからである。

13) この選外の句の添削は五七五のリズムや特殊音を正確に理解させるためにも重要な作業である。大会だからと言って優秀作だけに注目してはならない。学生の投票とは別に、私個人の好みとしての優秀句を発表することもある。



のように《中期》は川柳の創作・教室内での大会が中心となるが、同時に川柳の鑑賞・解釈という初期の形式の授業も並行して行う。そこでは導入期よりは少しレベルの高い・少し解釈の難しい句が取り扱われることになる。

《後期》（１）教室内川柳大会と平行して、日本の新聞への投稿を始める。投稿のための葉書を配布し、それに３句ほど書かせて宿題として提出させるが、この３句は教室内川柳大会の材料としても活用する。（２）新聞の現物やネットなどで川柳コーナーを紹介したり、川柳が引用されている様々な文章だけでなく、川柳入りの日常品（例えば、カレンダー、トイレトパーパー）などを見せたりして、川柳の占める今日的な位置を説明する。（３）過去の有名な川柳、および社会風刺の強い川柳などを紹介する。（４）新聞には２度ほど投稿するが、その際、先輩たちの入選作を示したり、掲載される可能性のある時期を告げて授業は終了する<sup>14)</sup>。

### 3. 予想外の出来事

このような形式で授業を行ったが、予想外の反応や出来事がいくつかあったので、それらを紹介する。以下に紹介する「予想外の出来事」は川柳を教材とすることによって引き起こされたと考えられるので、この「予想外の出来事」は川柳を教材とすることの有効性をそのまま立証していると思われる。

#### 3-1. 教室に笑いがあふれ活発な授業になったこと。

川柳自体の持つ滑稽さに加え、学生たちの奇想天外な解釈が続出することがその原因と思われる。奇抜な解釈や思いがけない誤解で他の学生から笑われる学生が続出するが、失敗し笑われることが日常化してくると、ほとんどの学生がため

14) ネットで確認させたいがためである。

らうことなく思い切って自分の意見を発表するようになる<sup>15)</sup>。

### 3-2. 教師と学生との間に親密感が発生したこと。(ユーモアの効用<sup>16)</sup>)

同じ状況で、同じように笑いを覚えるとき、人はそこに親近感を覚えるようである。教師と学生が同じ川柳を読んで笑い、お互いに相手が笑っている姿を見ることは、両者の間の親密度を深めるように感じられる。

### 3-3. 日本人に対する固定観念が変化してきたこと。

新聞川柳の作者が普通の庶民であり、その発想も思考も学生たちの感覚に近いものが多く、「日本人も私たちと変わらないわね<sup>17)</sup>」という文化や国を越えた感覚が学生たちの間に生まれた。日韓関係にはある種の固定観念があり、学生の間でもそれは強い。そういう学生にとって川柳の中にある日本の庶民の声は新鮮な発見なのである。

### 3-4. 教室内川柳大会では意外なヒーローが誕生した。

川柳大会では学生の投票によって最高得点の句を決定するが、そこで選ばれた句の作者は必ずしも、そのクラスの中で日本語の一番上手な学生とは限らない。川柳を使うこの授業では、日本語が余り上手ではない学生がヒーローになれる可能性があるのである。日本語を使う授業で、日本語が得意でない学生がヒーローになれる、と言うのは画期的なことであると思う。当該学生の学習意欲の向上だけでなく、教室全体の活性化にも影響すると思われる。

### 3-5. 学生同士が教え合う姿が見られたこと。

川柳が理解できず笑えない学生が、周囲の学生にその川柳の意味を尋ねる姿を

---

15) 他人から笑われたり、他人の失敗を笑うことを潔しとしない一部の学生もいた。

16) ユーモアの機能については、紙面の関係上省略する。

17) 授業後に後に行ったアンケートから。アンケートについては後述。

多数目撃した。川柳以外の教材では余り見られなかった光景であった。

## 4. 教材としての川柳の特徴

上記の「3. 予想外の出来事」は川柳が持つ以下のような特徴と関連性があるのではないかと考えられる。そこで川柳を教材としたときの特徴を他の教材<sup>18)</sup>との比較の上で整理してみる。

### 4-1. 他の教材より圧倒的に短いために、以下のような特徴が確認できる。

4-1-1. 短いので、その全体像が一瞬のうちに把握できる。長文の場合のように、各部分を正確に理解したうえで、全体を貫く論理を理解して始めて可能になる「読解」とは大きく異なる。川柳は単発的・文節的・独立的であり、軽便なのである。この点は学習者にとっては負担の軽減として受け止められるようである<sup>19)</sup>。

4-1-2. 短い詩である川柳には曖昧な部分がどうしても付随し、所謂「正解」は存在しがたい。言い換えれば、川柳の解釈には様々な可能性がいつでも開かれているのである。このことが学生の自由な発想と連想力を刺激し、活発な発言を引き出すことに繋がると思われる。学生達が話したくて堪らなくなるようなネタを川柳は豊かに提供してくれるのである。このことは複数の解釈が容易な句への学生の反応などからも立証される<sup>20)</sup>。

4-1-3. 川柳は短いので創作するのが比較的簡単で、長文のレポートや作文などと比べてもはるかに創作への壁が低い。それ故に何度でもレポートとして創作を

---

18) 「他の教材」とは例えば、新聞、小説・随筆などの長文を指す。

19) 特に長文の場合、その内容に興味を持たない学生にはその負担は特に大きい。

20) 例えば「夫婦げんかしてると分かるラーメン屋」という句について学生は7・8種類ほどの解釈を提示したことがある。

促すことが出来、回収した川柳で、前述したような教室内川柳大会を開催することが出来る<sup>21)</sup>。

4-1-4. 短い故に、短時間に数多くの句を鑑賞することが出来る。即ち、川柳と言う形を通して、日本の一般の庶民の意見を短時間に数多く知ることが出来るのである<sup>22)</sup>。他の教材には求めがたい特徴である。

4-1-5. 特定の語句の使用例を川柳の検索サイトを使って短時間に大量に集めることが出来る<sup>23)</sup>。用語用例の検索は種々の方法で可能ではあるが、川柳の場合は 17 音節と言う短い完結体の中で提示されるので便利である<sup>24)</sup>。

4-1-6. 特定の問題に対する多量の川柳を集中的に読むことによって日本の世論の動向を比較的簡単に知ることが出来る。勿論、特定新聞社の特定選者によるバイアスがかかった入選句ではあるが、それが全国紙である場合には、ある程度の日本の世論が反映されていると看做すことが出来る<sup>25)</sup>。

4-1-7 教室内川柳大会を少し膨らませて、世界各地で日本語を学んでいる別の国の学生たちとの合同川柳大会に拡大することも可能である<sup>26)</sup>。各国で時期を合わせて川柳を作り、同じ投票用紙を作成して投票すれば、日本語を通じた国際交流が可能になるのである。これも、川柳が短いからこそ可能になる交流である。

---

21) 作文を回収して作文大会を開くことは出来ない。

22) 1時間の授業で、20句の川柳を読めば、20人の意見に触れたことになるのである。

23) 毎日新聞の「まいまいコーナー」の検索機能が活用できる。

24) 例えば、「いつからか」という語句の使用例を川柳の使用例として検索するのである。毎日新聞の「まいまいコーナー」で検索してみると、「いつからか」を使った川柳が60句ほど見つかる。これを例示すれば学生の理解は早まると思われる。

25) 例えば、「アメリカ」という語句を含む多数の川柳を検索し分析すれば、日本人の対米感情のある側面を比較的簡単に知ることが出来るのである。

26) これまでに国際川柳大会を3度実施した。2007, 2008 (韓国・エジプト). 2009 (韓国・エジプト・台湾)。現地で日本語を教えている教師が連携して行った。

## 4-2. 川柳の創作と日本語

4-2-1. 川柳は作るのが比較的簡単で、近づきやすい文芸であることは言を待たないが、学生にとって生まれて初めて接する川柳を創作することは、大変な苦勞であったろうと思われる。そのことを素直に作品にした句も多い<sup>27)</sup>。しかし、戸惑いつつ、苦勞を重ねながら、作り続けているうちに「創作の喜び」や「他人から評価される喜び」を感じずる学生が増えてくるのも事実である。何か「新しいもの」を作り出すことの喜びに目覚めたかのように、豊かな感性を發揮して作品を作り出していく。このようにこの川柳授業は創作の喜びを比較的簡単に体験できる授業なのである<sup>28)</sup>。他の教材では難しい。

4-2-2. 川柳の創作は言うまでもなく五七五という字数制限の中で行われなければならないので、「字余り」や「字足らず」にならないようにするのが大変な苦勞である<sup>29)</sup>。学生は様々な方法で字数を合わせようとして、語句の選択や、語順の変更や、大胆な省略などを行う。しかし、その方法はその他の作文の時のそれとは明らかに違う。例えば100字制限の作文と比較してみるとその差は歴然としている。学生達は100字制限の作文では用いなかった方法を川柳の創作には使用するのである。彼等なりに日本語を自覺的に厳しく見直したのである。つまり川柳は日本語の見直しを学生に求めたのである。

## 4-3. ユーモアと川柳

既に述べたように(3-1. 3-2.)川柳は「滑稽(ユーモア)」をその属性として持っている。この点が他の教材と大きく異なる特徴である。ユーモアのある楽

---

27) 例えば次のような句(「やめてくれ川柳授業つまらない」「もうないよ川柳作るアイデアが」「今日もまた川柳作りどうしよう」)を学生達は作った。

28) 「創作の喜び云々・・・」は日本語の教育とは一見無関係とも見えるが、日本語を使用した川柳の創作によるという側面からここでは言及した。

29) 「字余りと字足らずが今いやなこと」という作品を作った学生もいる。

しい授業は、学生にとっても教師にとっても望ましいものであろう。ユーモアは笑いを誘い、笑いは学生と教師の親密感を深め、それは授業効果を高めることに直結する<sup>30)</sup>。「楽しくさえあれば良い」と言うのではないが、ゆったりとした楽しい気分で授業に臨めることは、授業効果を高める上で是非必要なことであろうと考えられる。川柳を教材として授業を進めると個別教師のユーモア感覚の有無とは関係なしに、学生と教師が笑いを共有する瞬間が自動的に訪れるのである。川柳はこれを可能にしてくれる教材なのである。

#### 4-4. 川柳と時事問題

川柳は時事問題を題材にしたものが多いので、学習者の関心を日本の現在に向けることが出来る。勿論、新聞やテレビ、その他のマスコミ媒体などを時事問題の教材とすることも出来るが、川柳の場合は、時事問題を批評・批判・風刺する立場から眺める視点を提供することになる<sup>31)</sup>。

#### 4-5. 川柳の作者は一般庶民

新聞川柳の作者が日本の一般庶民であるという点も、他の教材とは異なる点である。外国語学習者が使用する教材の中に、これほど一般庶民の声や感覚を豊富に含んだものは他にはないだろう。

## 5. 川柳劇の試み(日本語演劇祭に参加して)

ここまでは日本語授業の教材としての川柳を考えてきたが、ここからは川柳を

---

30) 特に会話の授業ではその雰囲気は大切である。

31) しかし、実際には日本の時事問題に強い関心を持つ学生は少ないのが現状である。

使った日本語演劇活動について報告したい。大邱大学では2012年の夏休みに、日本語日本学科の行事として川柳劇を創作し、第12回日本語演劇祭（在釜山日本総領事館主催）に参加した<sup>32)</sup>。川柳を使うことによって、これまでの演劇とは様々な点で異質の演劇活動であったと考えている。つまり川柳の持つ特徴がここでも発揮されたのである。

## 5-1. 川柳劇の構成

まず劇の司会者（ナレーター）が学生の作った川柳を1句<sup>33)</sup>、舞台の脇で大きな声で読み上げ、引き続きその内容と関連する寸劇（7分程度<sup>34)</sup>）を2-3人の登場人物が演じる。そして最後に司会者がもう一度舞台に現れ、同じ川柳を読み上げる。これでワンセットである。このパターンを5つ繰り返すことで川柳劇は構成される。

## 5-2. 小グループ単位の活動

以上のようにこの演劇はオムニバス形式であるため、使用される川柳の数だけ小部分に分割することができる。今回の場合は5つの川柳を使うので、劇全体を5つの部分に分けることができ、学生（とそれを指導する教師）も5つのグループに編成することができた（各グループ3-4名の学生と指導教師1名）。この川柳劇ではシナリオ作成から演技まで殆ど全ての過程がグループ単位の活動として行われる。「小グループ単位の活動」がこの川柳劇の特徴である。この小グループは独立的に活動することになるのでそこから通常の演劇とは異なる様々な利点が生まれるのである。

---

32) 学科の教師全員が指導に当たり準優勝という結果を得、学生達にも好評であった。

33) 毎日新聞に掲載された学生の作品。今回使用したのは卒業生たちの入選句3句と、有名な日本の川柳2句で構成した。例えば「勉強とダイエットなら明日から」。

34) 全体が35分という時間制限が与えられていた。

### 5-3. シナリオ作成

まず各グループは自分たちが担当する川柳の内容を核としてイメージを広げて独自のシナリオを作成することから始める。このシナリオ作成の過程では、グループのメンバー全員が各自のシナリオを持ち寄り、グループ内で発表・意見交換を重ねて時間をかけ、一つのシナリオが作り上げられる<sup>35)</sup>。この時、メンバー達はイメージの核となる川柳を共有しているから、シナリオの大まかな方向性を維持することが出来る。このようにして、グループのメンバー全員がひとつのイメージを共有したシナリオ・ライターになるわけである。これは小グループであるが故に可能になるのであって、通常のシナリオ作成では難しい。このようにシナリオ創作という初期の段階から関与するためか、演劇全体へ関心度や責任感も強くなるようである。つまり、他人の作った既存のシナリオを覚えて演技するだけの受動的演劇とは異なり、「自分達の作った演劇」として、より能動的になるようだ。

### 5-4. セリフの均等化

通常の演劇ではどうしても主人公を中心とした数名だけにセリフが集中する傾向があるが、このオムニバス形式では多くの登場人物に平均的にセリフを配分することができるので、多数の学生が劇中の重要人物として登場し、それぞれが重要なセリフを口にすることが可能になるという特徴がある<sup>36)</sup>。つまりグループのメンバー全員が重要な役割を演ずる俳優となるわけである。このことは教育の一環としてこの演劇を考えると、意義深いものがある。これも小グループを単位とした結果である。

### 5-5. 時間の効率的な使用

---

35) この段階で才能を見せる学生も多い。

36) 言い換えれば、通常の演劇で見られるような、主人公のみに負担なほど多くのセリフが集中するという問題や、それとは逆に端役には殆どセリフが無いという弊害から開放されるのである。



さらに各グループはシナリオ作成はもちろん、演技の練習もグループ単位で時間を決めて別々に行うことができるから、時間の効率的使用という観点から見ると画期的である。通常の演劇の場合には全スタッフが一堂に会して練習することが多いので、どうしても無理な時間調整を強いられたり、無駄な待ち時間が生じたりする場合もあるが、川柳演劇の場合には、グループ毎に集中的・効果的に時間が使えるのである。このことは指導する教師の立場からも歓迎されるだろう。

以上のような特徴は「小グループ単位」ということから派生してくる現象と見ることが出来る。そしてこの「小グループ単位」の活動を可能にしたのは、グループの核としての川柳の存在がある。短く完結しながらも、それでいて豊かなイメージを膨らませることができる川柳の存在がこの小グループのメンバーを結び付けているのである。

## 5-6. 日本語演劇の新しい形式に

上述のような特徴を川柳劇は持つため、学生には演劇へのハードルがより低いものとして感じられ、積極的に参加すると考えられる<sup>37)</sup>。学生の確保が容易になれば、日本語学習者による日本語演劇はいっそう盛んになることと予想され、この川柳劇は海外で日本語を学ぶ人たちにとっての日本語演劇の新しい形式となる可能性が充分にあると考える<sup>38)</sup>。

## 6. 学生へのアンケート調査<sup>39)</sup>

川柳授業を1学期間行った後に行ったアンケート調査の結果を紹介する。「川

37) 実際、当初から約20名の参加希望者が比較的簡単に募集できた。

38) 勿論、川柳劇が持つ欠陥も露呈した。今回は5つのグループが分節化し過ぎて、全体としての統合性の欠如、舞台装置の製作問題、照明・音響係との連携の困難さ、演劇全体のリーダーの不在などが問題となった。

39) 2006年（1学期間終了後）に行った無記名のアンケート調査の結果

柳を使った授業はあなたにとって楽しい授業でしたか？」という問いに、全然そう思わない(1)、あまりそう思わない(2)、普通(3)、ある程度そう思う(4)、大いにそう思う(5)、という調査に15人の学生の平均得点は4.47であった。この4.47という数字は同時に行った「川柳を使った授業は日本語を学習する上で役に立ったと思いますか？」(同平均4.13)、「川柳を使った授業は日本を知る上で役に立ったと思いますか？」(同平均4.13)という数字と比較すると、相当に高いものであることが分かる。彼らが楽しかった理由としてあげた言葉を箇条書きにしてみる。

- \* 硬い文章ではなかったので負担なく楽しむことができた<sup>40)</sup>。
- \* 自分が考えたことを、正しいとか間違いとか関係なしに話すことができて楽しかった。
- \* 短い文章の中に込められた意味を探し出さねばならないので楽しかった。
- \* 受動的に読み、暗記するより、楽しかった。
- \* 奇抜なアイデアのお陰で面白かった。
- \* 自分で日本の文化を楽しむことができたという点がよかった。
- \* 川柳を見て、笑ったり考えたりして楽しかった。
- \* 川柳というものの自体が奇抜でおもしろかった。
- \* 学生や先生の句が日本の新聞に載り、学生と先生と一緒に作る授業で良かった。
- \* 何かを作って一緒に参加したという感じで本当に楽しかった。
- \* 授業と言うより、言葉を使って遊んだ1時間でした。
- \* 勉強ではなく、遊びとして授業に参加したと思う。ものすごく楽しかったです。
- \* 今までやってきた授業とは異なり、新しく、斬新で面白かったと思う。

川柳の持つ滑稽さ以外の様々な要素が、ここには述べられていることに注目すべきである。「受動的に読み、暗記するので」ではなく(即ち能動的に)「(川柳)中に込められた意味を探し出し」たり、「勉強というより遊び」として「参加」し、「正しいとか間違いとか関係なしに話すことが出来て」「学生と先生

40) 韓国語で書かれたものは筆者が日本語に翻訳した。

と一緒に作る」「新しい授業」だったので「楽しく」「面白かった」、と言う風に要約できそうである。川柳を教材とした授業が学生から好意的に受け止められている姿である。しかし、全ての学生がそう受け取ったのではない<sup>41)</sup>。

また、「川柳を使った授業は日本を知る上で役に立ったと思いますか？」という問いへの答えとして次のような反応が見られた。

- \* 日本人は外国人だから別の考えがあるとおもいましたが、日本人の他の人が、自分もそのように思っていたことを川柳で作るのを見て、・・・
- \* 日本人も韓国人と同じような人間だな・という感じができました。
- \* 日本人でも韓国人でも同じ事考えて生きているんだなと感じたりして、今まで思っていなかったことを考えることができた。
- \* 日常生活の中から作られているので、日本を知る上で役に立ったと思います。

韓国人学生に、日本の一般庶民へ親近感を抱かせる役割を川柳授業はしたのではないかと考える。

「川柳を使った授業は日本語を学習する上で役に立ったと思いますか？」という問いに対しては質問が抽象的すぎたのか一般的な答えしかなく、筆者が当初目標としていた「特殊音」に言及したものは無かった。

## 7. 今後の課題

### 7-1 川柳授業の効果の確認問題

上で言及したが、川柳授業に参加することで日本語の特殊音の発音能力や 拍感覚がどれだけ向上するかというのを客観的データとして提出するのは難しい。

41) 「\* 元来、詩的な才能やひらめくような機転に乏しい自分には多少辛い授業だった。

\* (自分は) 性格が寡黙で、他人を笑うということも経験がなかったので。

\* 自分で作るのがとても大変でした。」というような回答もあった。

学生の特異音の「発音の向上」の姿を統計的に取り出すことは困難なので、次善の策として、特異音の「聞き取り能力の向上」の様子を調べることが考えられる。特異音の聞き取り能力とその発音能力は比例するであろうという仮説に基づくものである<sup>42)</sup>。学期の開始時と終了時に同じ聞き取りテストを実施することである程度その効果を確認することが可能であろうと考えている。

## 7-2 川柳に馴染めない学生の問題

どうしても川柳に馴染めない学生が一部発生することがある。様々な対策を考えてきたが、これからもさらに努力を重ねるべき課題である。

## 7-3 評価の問題

川柳授業では、学生の成績をどのように評価すればよいのかという難問がある。川柳の創作能力は評価の基準とは出来ないもので、解釈とその文章力、字余り字足らずの句の判別能力、特異音の聞き分け能力、有名川柳の記憶能力などが考えられるが、まだ、名案は無い。

## 7-4 川柳授業を広めるための活動

ここで報告した内容の中に筆者の勝手な思い込みや我田引水的要素が含まれている可能性は否定できないであろう。本報告は統計的に数値を提出してその検証を受けるべきではあろうが、まだその段階にまで至っていない実験的な試みにすぎない。今後、川柳を教材とした実験的授業がさらに行われ、実証的データが増えることが期待される。

\*毎日新聞に掲載された川柳を許可も得ず、作者の名前も記載せずに、多量に引用したことをお詫び申し上げます。

---

42) 例えば、「かーかっこ」という音を聞いて、正確に、「かーかっこ」と表記できる学生の方が、「かっかこ」とか「かかこ」と表記する学生よりは、「かーかっこ」と正確に発音する確率が高いだろう、という仮説である。

## 【参考文献】

- 中野二郎 (2010) 「リズム記号の提示による長音の学習効果」  
WEB版『日本語教育実践フォーラム報告』
- 坂野信彦 (1996) 『七五調の謎をとく』大修館書店
- 友岡純子 (1994) 「異文化理解と季節感 ---俳句を教材とした日本事情の授業---」  
『言語文化と日本語教育』第7号 お茶の水女子大学日本言語文化学会
- 松井貴子 (2006) 「チェコ人学生の俳句体験」  
『宇都宮大学国際学部研究論集』第27号
- 栗田英二 (2007) 「川柳を教材とした日本語・日本学授業の可能性について」  
『人文科学研究』第30集 大邱大 大邱大 人文科学研究所
- \_\_\_\_\_ (2008) 「川柳を教材とした日本語・日本学授業の可能性について(2)」  
『人文科学研究』第31集 大邱大 大邱大 人文科学研究所

## 要 旨

日本語の特殊音（長音・促音・撥音）の発音指導を行うための方法として川柳を教材として用いた実践教育の報告が本稿の目的である。まず授業の様子を、実際に使用したプリントなどを提示しつつ出来るだけ詳しく述べた後、予想外の授業効果（楽しく活発な授業になったこと・日本語力の弱い学生から学習意欲を引き出したこと・教師と学生の親密感が強まったこと・思わぬヒーローが誕生したこと・日本の庶民への理解が深まったこと）などを報告した。つまり特殊音の発音指導以外にも川柳が役立つことが分かったのである。

このような授業効果は、川柳がもたらしたものと考えられるので、川柳が他の教材とは異なる点を列挙し、教材としての川柳の有効性を抽出した。例えば、川柳は短いので、学習者の負担を軽減し、想像力を刺激し、教室内で大会を開くことができ、外国の日本語学習者とも簡単に交流ができ、さらには日本の時事問題や世論の動向を知る上で利用できる。また川柳は滑稽さ（ユーモア）をその真髄としているので、学生と一緒に川柳を読み解釈を進めて行くだけで自動的に教室に笑いがあふれ、ゆったりとした楽しい気分で授業を進めることが出来る、というような川柳を教材とした場合の特徴にも言及した。

授業外の活動として世界初の川柳劇を創作したことも報告した。各グループが選択した一つの川柳を核として学生と教師からなる「小グループ」をいくつか構成し、シナリオ作成から演技まで、これらの「小グループ」が単位として活動するという、これまでの常識とは異なる形態の演劇である。それぞれの川柳を中心として纏まった「小グループ」が作り上げるオムニバス形式の演劇は、学生の積極的関与を引き出すだけでなく、学生・教師双方の負担を軽くするなどという、様々な利点もあるので、日本語学習者による川柳劇はこれからさらに広まることが予想される。最後に川柳授業についての学生へのアンケート調査の結果を簡単に紹介し、今後の課題（特に客観的データ確保の必要性）を述べた。

キーワード：川柳、特殊音、笑い、創造性、学習意欲、川柳劇

투 고 : 2013. 5. 31

1 차 심사 : 2013. 6. 15

2 차 심사 : 2013. 7. 6